私と南京大虐殺――本書の刊行によせて（田中宏）……9
はじめに――南京大虐殺から七十二年　加害と被害から歴史を掘り起こす……13
①心の中で温めてきた構想／13
②日本と中国で南京戦の証言を収集／14
③日記や手紙から南京大虐殺の実態を読み取ることができる／16
④第十六師団歩兵第三十三聯隊第十二中隊の松村の手紙と三人の戦友の日記／17

第Ⅰ部　松村芳治の証言

1　南京戦に参加した元兵士・松村芳治との出会い――22
南京戦参加兵士を探すための手がかり／22
南京戦に参加した兵士への呼びかけの手紙／23
南京大虐殺情報ホットライン／27
南京戦に参加した兵士・松村芳治を訪ねる／27
初めて松村が語る南京戦／29
南京戦に参加した戦友を紹介してもらう／30
証言集『南京戦・閉ざされた記憶を尋ねて』の出版を喜んでくれた松村芳治／32
松村の死／33

2　松村芳治の青年時代――35
小学校、高等小学校の時代／36
青年学校で習ったのは、軍隊の準備「天皇陛下の御為に」／37

3 松村芳治の軍隊生活

内務班教育／40
敵襲の報復に近くの部落の母子を射殺／41
上海から南京への道／43
揚子江に逃げる無数の中国人を撃ち殺す／43
南京城内の掃蕩で男という男を撃ち殺した／45
難民収容所から屈強な男を引き出し殺す／46
クリークの畔で集団虐殺／47
城内で死体の片づけ／48
城外で駐屯して徴発ばかり／49

第Ⅱ部　手紙・日記・証言から見る南京戦　歩兵第三十三聯隊第十二中隊の兵士達

南京で書いた手紙や日記は、たくさんあったはず？／52
松村が所属した歩兵第三十三聯隊第十二中隊が南京で行なった残虐行為／55
上海から南京への過程で戦地で手紙や日記を書いた兵士達のよこがお／58

1 日中戦争開始から南京攻略戦へ

日本軍人としてはお国のために働くのは当たり前（一九三七年九月二日）……64
大阪でも出征する我らに盛大な歓送（一九三七年九月五日）……69
戦死は本懐、死んで靖国に祀られるのは名誉（一九三七年九月十日）……73
戦闘と行軍に明け暮れ、手紙も出せなかった（一九三七年十月二十一日）……79

食べ物が来ないので、中国人の家へ入って盗んでいる（一九三七年十月二十二日）……86
甯晋では、顔も洗え睡眠は十分とれる（一九三七年十月二十五日）……92
新しい任地は○○と書き、家族にも知らせない（一九三七年十一月十一日）……97

2　南京陥落と掃蕩という虐殺

南京目指して、競争の追撃戦（十一月十三日～十二月二十一日の間）……105
南京大虐殺が始まった（一九三七年十二月十三日～）……115
「揚子江で五万の兵を全滅」と故郷に手紙／115
「揚子江に逃げる無数の中国人を撃ち殺す」／122
「集団虐殺する機関銃の音がずっと聞こえていた」／124
「河面は死体でびっしり、中山埠頭で死体片づけをさせられた」／126
十二月十三、十四日の澤村次郎の日記／128
「下関へ攻め下り、集団虐殺を目撃する」／132
「下関で数千人の人と一緒に私は重機関銃掃射された」／135
「紅卍字会の父を手伝って死体処理をした」／137
十二月十三、十四日の豊田八郎の陣中日記／139
「南京城内を掃蕩、分隊で五十五名殺す」／140
「日本兵にトラックで連行され機関銃掃射された」／142
「煤炭港で数百人の人が殺されるのを見た」／144
長谷川悌三の陣中日記／146
「中山埠頭で大勢の男と共に集団虐殺され死体の中から生き返った」／147
南京陥落の翌々日以降も厳しい掃蕩が続く（十二月十五日～十七日）……149
南京東郊外の湯山鎮湖山村の状況／155
南京陥落後の大規模な掃蕩が終わって下関に駐屯、略奪に精を出す（十二月十八日～二十二日）……161

3　南京城外西善橋に駐屯――172
南京城の南八キロメートル　西善橋に駐屯し連日略奪（十二月二十三～二十七日）……172
西善橋で初めての正月を迎える準備（十二月二十九日、三十一日）……180
南京で新年を迎える（一月一日）……187
正月過ぎて西善橋の警備は遊んでのんびり（一月初め頃）……192
「日本軍に出くわし従兄弟は銃殺私は重傷を負い生き延びた」／197
西善橋駐屯は時間的に余裕あり、たくさんの手紙に返事を書く／199
「日本兵は村へ来て、豚を盗り女を追い回していた」／206
南京を離れ次の警備地へ移動（一月二十八日）……207
おわりに代えて――南京・戦場からの手紙や日記を読み取って……209

第Ⅲ部　「程瑞芳日記」を読む

1　加害・被害の証言から金陵女子文理学院での日本軍の暴行を検証――214
はじめに……214
「日記」の筆者が程瑞芳と確定した経緯……219
見えて来た南京大虐殺当時の南京における国際安全区の状況……222
(1)日本軍は国際安全区のエリアに乱入したので、決して「安全」ではなかったこと／223
(2)女性が守られるはずの金陵女子文理学院でも性暴力が頻繁に起きていたこと／226
(3)安全区内でも市民の登録をさせて、男性を連行し集団虐殺が公然と行われていたこと／231
(4)性暴力と市民の虐殺をどこでも、いつでも不断に再生産している日本軍の実態が見えてきたこと／234

まとめとして……238
2　程瑞芳日記――被害証言と加害証言・日記を照らして――241
用語解説……323
あとがき……324